



踏まれ草

千田夏光
同時代叢書

汐文社

千田夏光

踏まれ草

同時代叢書

汐文社



著者 千田夏光（せんだ かこう）

1924（大正13）年，大連に生まれる。

毎日新聞記者を経て，現在，著述業。

評論・ノンフィクション。

著書 『従軍慰安婦（正・続）』『性的非行』『暴力非行』

『あの戦争は終わったか』『死肉兵の告白』『皇軍

“阿片”謀略』『精薄児の書いたラブライター』『オ

ンナたちの慟哭』『終焉の姉妹』など多数。

現住所 東京都江東区亀戸2の6の3の602

踏まれ草

同時代叢書

1981年7月15日 初版第1刷発行

定価1200円

1981年8月1日 初版第2刷発行

著者 千田夏光

発行者 吉元尊則

発行所 (株)汐文社

東京都文京区本郷 1-26-10 中村ビル

電話03(815)8421 振替(東京)2-14150

印刷 荏部印刷 製本 東京美術紙工 装幀 INO企画・高田 宣子

踏
ま
れ
草

大阪在住の被爆者野中フミ子さんの『醜貌』
というパンフレットを読んだ。胸をうたれ、
高木静子さん（大阪市原爆被害者の会）の助言も
あってこの稿を書いた。

目次

5	4	3	2	1
鍋焼 うどん	踏 まれた 草	髪 の長い 女	離 棄 47	濃 の湖 5
180	136	92		

1 濃^{うみ}の湖^{うみ}

玄関まで迎えにきてくれている隣りの小野さんの奥さんへ、

「ちょっと待って下さいね」

声かけながら、フミ子は腰をかがめ、もう一度鏡をのぞきこんだ。頭髮^{あたま}へ手をやった。立つとや
つと腰までの、毎日磨^{みが}いてきた紫檀^{したん}の可愛らしい鏡台である。

カッチカッチ、音たてる柱の振り子時計は、あと二分で午前七時をさすところだった。昭和二十
年八月六日であった。

パーマをかけて歩くと、誰が教えたのか「パーマネントに火がついて、みるみるうちにハゲ頭」
道ばたの子供たちが囃^{はや}したてる時節になっていて、そんなことでもう半年も美粧^{めいしょう}院^{いん}にいていない。
そのせいだろう、いくらブラシをかけても右のビンの髪^{かみ}が思いどおりになってくれない、それが気
になって仕方なかったのである。生まれつきおしゃれたったのかもしれない。

もっとも女はいつもおしゃれである。おしゃれが好きである。男もしゃれるが、おそらく三倍はおしゃれである。そして、女がおしゃれを楽しんでいるときは平和なときであり、おしゃれの好きな女は男の何倍も戦争と戦争のにおいが嫌いである。多くの女のおもしろさは、そのことに気がついていないところにあるのだが、とにかくその朝、いくらブラッシングしても言うことをきいてくれない右のビンの髪が乱れが気になっていたのだった。

気のついていないことといえば、フミ子はいまひとつ気がついていなかった。彼女の夫勇一郎は広島の新天地劇場という実演物専門の劇場で宣伝部主任をしていたところを、いまどき大の男がそんな所で働いているのは許せないと呼び出され、半年前の昭和十九年十二月「徴用」され、呉軍港の人間魚雷「回天」「蛟竜」をつくっている海軍工廠で働くことを命じられていた。

広島から呉まで列車で小一時間である。朝は午前六時に家を出て、帰宅は午後九時、十時の生活がはじまったのだった。作業内容は軍事機密とかでフミ子にも言わなかったが、それまでの劇場宣伝部の何十倍もきつい仕事であることはわかった。家にもどると口を開くのもしんどいらしく、横になるなり泥のように眠るだけだった。

夜半に、なにかこわい夢でもみるらしく、うなされるようになったのだった。そんなことでフミ子は、天井をむいて寝ていることができないのだった。右隣りの布団まで身をのぼし夫の左手を、うなされるたび、しっかりと握りしめてやるのだった。そんな毎日をおくっているうち、それがくせになり、いつかいくらブラシかけても頭の右半分が乱れたまま言うことをきいてくれなくなってい

たのだったが、それにも気がついていなかったということである。二十七歳の夏であった。

「佐々木さんの奥さん、急がないと、みなさんお待ちかねよ」

また玄関から小野さんの奥さんの声がした。二歳年上で、「ねえ、おイモわけてくれる農家を知らない」と、配給の米がなくなりかけるととびこんでいたり、いつもなにかとお姉さんのように甘えにいく奥さんだった。生粋の広島っ子で、ご主人は兵隊にとられもう一年半も家にいない。子供のいないのもフミ子と同じだった。

「はあーい、いまいきまーす」

その声でフミ子はやっと諦めた。腰のモンペの紐にはさんでいた藍色の日本手拭いと、鏡台にかけてあった純白の日本手拭いを、とっさに見較べ、ちよつと考えてから鏡台のをとって頭にかぶり、その上に麦色のムギワラ帽子をのせた。こうすれば頭髮を他人に見られないですむと思ったのである。

それに、一番上の日除けにするムギワラ帽子の色と、草色の格子縞の木綿のブラウスとの間で純白の日本手拭いがヒラヒラすれば、黒のモンペといっしょになって素敵だろうとも思ったのだった。「またフミ子さんのおし、やれがはじまったのね。でも今日の作業は頭から土ぼこりだらけになるらしいわよ」

玄関に出ると小野さんの奥さんが笑っていたが、よく見るとその奥さんだって、白いブラウスの胸に自分で刺した刺繍のヒマワリをつけていた。糸を買うにも配給切符がいり、その切符をもって

いってもお店に刺繍糸など売っていない時代である。おそらく広島じゅうを走りまわったに違いなかった。

フミ子の住む松川町には十組ほど隣組となりぐみをつくらされ、それをまとめ松川町連合隣組という組織にまとめさせられていたが、その日、松川町連合隣組の奥さんたちは、直線距離で七百メートル、曲がりくねった道跡をいくと一キロ南の比治川ひじがわにかかる比治山橋ひじやま近くの建物疎開跡地の整地作業に狩り出されることになっていた。

建物疎開とは、昭和十三年五月一日から施行された「有事立法」、戦争目的のためなら国民の生命財産のいっさいを国が徴用できるとする「国家総動員法」によるもので、たとえば、軍事施設の周囲に防火地帯をつくりたいとした場合、そこに住んでいる「国民」を追い出し家屋を「徴用」、いっきよに壊してしまうといったものだった。比治山橋付近の家々がその徴用をうけ、壊されており、その壊した後の土地の整地をしるというのであった。

力のいる家屋破壊作業には、元気な中学生や、大学、高等専門学校の学生生徒や、ときとして女学生など女性も動員されたが、あとの整地には家庭にいる婦人が隣組をつうじて狩り出されたのだった。「お気の毒にねえ」警官や憲兵の監視するなかを、そんなことを小声でささやきながらやっていたのだった。

その八月六日は、松川町連合隣組に「狩り出し」命令が出され、子供のいない奥さんたちが動員されることになっていったのだった。

「さあ、いきましょー」

小野さんの奥さんの後について松川町連合隣組事務所へむかうと、もう二十人近い奥さんたちが集まっていた。出発は午前七時となっていた。でも集まった奥さんたちの数が正確に幾人だったか、フミ子は知らない。記録も残っていない。

実際に出発したのは午前七時を三分ほど過ぎていた。もしこれが軍隊で三分も遅れたら全員並ばされ、ガチン、間違ひなく最低一発ずつは殴られるところだが、そこはそれ「奥さん部隊」である。フミ子みたいなのを抱えながら三分の遅れですんだのは立派だったのかもしれない。それに兵隊集団と違うから、隊列を組み軍歌を高唱しながらということもない。なんとなく一団にかたまり、そろそろと歩き出したのだった。

松川町から東南へ、桐本町に出ると電車通りになる。中学校も女学校も戦争の役に立たない授業など上からの命令でやめさせられ、あちこちの軍需工場や軍施設に動員されていた。その学校でない「職場」にむかう中学生、女学生をいっぱい乗せた電車が走っていた。

雲は見当たらなかった。記録には巻雲、積乱雲が見えたとあるが、フミ子たちは見なかった。「今日もきつと暑くなるわね」その空を見あげながら小野さんの奥さんが言ったとき、「でもウチの主人はあまり汗かきでないから」ちよつとトンチンカンな返事をフミ子がし、それに、

「また佐々木さんの奥さんの「ウチの主人」の話がはじまった」

かたまりの後の方から誰かが笑いかけたとき、とつぜん「警戒警報」の発令をつげるサイレンが

鳴った。こちらは中国軍管区司令部の記録に残っている。午前七時九分である。「奥さん部隊」は、かねて指示を受けていたとおり足をとめ、近くの防空壕に身をよせた。

このとき、午前二時サイパン島を発進した三機のB 29が豊後水道から北上、広島市上空を通過、三次^{みよし}の上空までいき東へ転進しつつあったことは、「奥さん部隊」の誰もが知らない。東へ転進したところで警報は解除になった。アメリカ空軍は、東京を焼きつくし大阪を焼きつくし全国主要都市のほとんどすべてを焼土にしてしまったのに、なぜか京都と広島には手をつけなかった。それで今日も、ただたんに通過しただけだろうと中国軍管区司令部は判断したのであった。

午前七時三十一分、警報解除を告げるサイレンの音とともに彼女たちはまた歩きはじめた。やはり、ぞろぞろとした足どりである。比治山神社を左手にみるあたりから、左手はずっと比治山と呼ばれる笠^{かさ}をふせたような小高い、山というより丘になる。ゆったりしたスロープの道をたどった頂上から、広島湾に沈む茜色^{あかねいろ}の夕陽を、フミ子は一度だけ夫に連れられ眺めにきたことがあった。でも地理オンチの彼女は、どこからどのように登ったか憶^{おも}えていなかった。

あれはどの道だったかな、記憶の糸を、比治山をおおう樹々^{きこぎ}の梢^{こずえ}にからませながら考えているうち鶴見橋にきた。そこから右手は道路にそって京橋川となる。広島^かの街を北から南へ、おいしいカキのとれる広島湾へ注ぐ水色の水の流れる川の一本である。「広島^かの川^かって水^{みづ}のにおい^{におい}がするでしょ」引越してきてすぐ、そんな自慢をされた川の一本である。

その京橋川に沿い、さらに「奥さん部隊」の足で、二十分も歩くと比治山橋。その東側が命じられ

た作業場だったが、着いたのは午前八時十二分だったが、ここでも「奥さん部隊」は「奥さん部隊」であった。

「……そこね、その裏のお宅の坊やの手もとを」なにしてるの？」ってのぞきましたらね、どうでしょう、十匹ちかいコメツキバツタを煮ているのよ」

「お鍋で？」

「そうなのよ、なんでもお友だちの家へ遊びにいったら、そこのご両親が農家の出身で「田舎ではイナゴを佃煮つくだてにして食べるが、これがうまいものだ」と話していたのね、それを聞いてイナゴもバツタだからとコメツキバツタを捕えてきて食べようとしていたのね」

「ほ、ほ、ほ、配給だけだとお腹すが空きますものね。それにしてもコメツキバツタをねえ……」

道々みちみちつづけてきたお喋りしゃべりのつづきが終るまでは作業の準備にも入れないのだった。「ほ、ほ、ほ……」笑っているのはフミ子で、「……そこね」とコメツキバツタ事件を語っているのは小野さんの奥さんだった。そのときである。

「あれ、B 29じゃないかしら、空襲警報でないけど……」

フミ子のすぐ横にいた誰かがこの人の名はいくら考えても思い出せない空を見あげながら小さく叫んだ。つられてフミ子も、ムギワラ帽子の、ヘリへ右手を小手にかざし上空を見あげた。

鮮やかな群青ぐんじょうの空に、キラリ、銀色の飛行機がたしかに一機浮かんでいた。これまでフミ子は、B 29というアメリカ空軍の超重爆撃機、日本じゅうの街を焼きつくしてきた「鬼のような飛行機」

をしげしげと見たことがなかった。つられて空を見あげた心のどこかに、そんな「怖い物みたさ」があったのかもしれない。

でもあれがB 29だとしたら、空襲警報が鳴らないのにあんな所をとんでのおかしいわね、日本軍の飛行機なのじゃないのかしら。なおも見あげる頭の隅っこで、フミ子はそう思いはじめた、いや思いはじめようとしたのと同時であつた。

パーッ！

鋭い閃光が、視界をいっぱいに貫いた。何十万頭もの狂馬が、かたまりになつていっぺんにおどろこみ、瞬時に網膜を貫き、かけぬけていく、そんな疼痛が眼の奥の奥を走つた。

顔の眼と鼻と頬と右手で、「ジュース」音が走つた。灼熱の火にスルメが焼かれ縮みあがるときの音であつた。生きたエビを天麩羅鍋に放りこんだときの、あの音であつた。音のした皮膚という皮膚が「ビ、ビ、ビッ」縮んだ。それもこれもが、一瞬、いや半瞬のことだった。この「ジュース」という音、「ビ、ビ、ビッ」という音をフミ子は今もはっきり憶えている。おそらく、墓の底に眠るようになって、まだ忘れないだろう。

音がまだ鼓膜に残っているところから、眼が見えなくなりはじめた。どうして、どうして私の眼は私の言うことを聞いてくれないの。必死に誰かに問いかけたが、眼の前は、みるみる暗くなる一方だった。何かを掴もうとした。手を動かした。でも、なにもかもが掴めないのだった。そして、すべてが本当に消えた。フミ子のなから消えた。

パツと、閃光がフミ子の体を貫いたのは、昭和二十年八月六日午前八時十五分であつた。右手には、お昼になつたら小野さんの奥さんに半分あげようと思つて四ヵ月ぶりにつくつた卵焼きの入つてゐる弁当箱をもつていた。

午前七時二十五分ごろ、いったん東へ転進した三機のB 29のうち、二機は同四十分ごろ西へ広島上空にもどつたこと。その一機が「原子爆弾」を投下したこと。残りの一機が、そうしたフミ子たちの上にわきあがるキノコ雲を、冷たいカメラのレンズに静かにおさめつづけていたことなど、すべてを消されたフミ子は知るよしもなかった。

失心(失神)とは「急激な精神的感動、恐怖、驚愕^{きやうがく}などのため、また外傷、打撃により反射的に脳貧血を来し一時に意識を喪失すること」(広辞苑)とあるが、フミ子の場合はいずれになるのだろう。ともあれ、どれくらいの時間であつたか、すべてを消されたフミ子は知らない。

ふと、眼の前に動くものが見えた。頭のどこかで「ああ小野さんの奥さんだな」ぼんやり思った。ゆっくりあたりを見まわした。何もなかった。何も見えなかった。さっきまでそこにあつた京橋川のむこうの家並みは燃えつきた薪^{まき}の山になって、黒や灰色や白の煙をあげ、その煙のなから蛇の舌のような赤い炎がチヨロチヨロとあがつていた。フミ子の憶えているのはそれだけである。いっしょにきた奥さんたちは、小野さんの奥さんだけで、あとは一人もいなかった。

私を置いて、みんな帰ってしまったのだらうか。いやいや、そんなことはない。私だけ置いていくなんて、そんなことはない。立ちあがると、小野さんの奥さんは両手を胸の前で抱くようにして

立っていた。「小野さん、小野さんの奥さん」声をかけたが、川の方をむいたまま振り返ってくれなかった。自分の喉は声をいくらしぼり出そうとしても、声の出ない喉になっていることを、フミ子は知らないのだった。

小野さんの奥さんの耳も、何を言っても聞こえない耳になっていることを知らないのだった。右に左に足もとに、ボロボロに裂けて焦げた名ばかりのブラウス、モンペをかすかにつけ、眼をむいて転がっているのが、さっきまで自分と小野さんの奥さんの「バツタ少年」の話に笑いこけていた奥さんたちだとも知らないのだった。

もう一度「小野さんの奥さん」呼びかけようとしたとき、奥さんが歩き出した。立ちあがると、京橋川のむこうにひろがって見えるはずの広島の街が消えており、天空から間断なく灰色の粉が降りつづいているのもわかるはずだったが、それもこれも見えなかった。その灰色の粉が「死の灰」と呼ばれ人間を孫子の代まで苦しめる悲粉であることも知らないのだった。

フミ子は松川町に引越してきてまだいくらもたたない。それに地理オンチである。ここで小野さんの奥さんに置いていかれたら家に帰れなくなる、頭にわいてくるのはその思いだけだった。彼女にとって「家」と「夫」は同意語であり同義語であった。家にもどれなくなるということは、夫のもとにもどれなくなることであった。「小野さん、小野さんの奥さん、お願い、私を置いていかないで」声の出なくなっていることも知らず、フミ子は必死に叫びながら、歩きはじめた小野さんの奥さんの後を追った。